

『労働運動研究』総目次・推薦文

現代史史料としての『労働運動研究』誌

加藤 哲郎（早稲田大学客員教授・一橋大学名誉教授、政治学）

『労働運動研究』の1969–2014年総目録が刊行された。喜ばしいことである。版元の労働運動研究所は、ウェブ上にホームページを持っており、1988年復刊第1号以下の特集タイトルは確認できる。2007年12月復刊第18号以降は総目次も掲げており、いくつかの論文についてはインターネットで読める。だが復刊以前の内容については、若い労働運動関係者・研究者にはわからないだろう。

最近では労働運動研究者自体がほとんどいなくなり、雑誌の存在そのものが知られていない。現代史研究者が真っ先に参照する国立国会図書館のサーチエンジンNDRでは、1969年創刊号からのデジタル版所蔵が確認でき、何度かクリックして各号目次も見ることができ、全体像を把握するのは難しい。例の著作権に関わる複写制限があり、論文を特定して申請しなければならない。地方在住者には、煩わしいことだろう。総目録は、そんな時に活用できる。

大学図書館等を横断するCiNii Booksで検索すると、『労働運動研究』誌を所蔵する機関は多くはない。それも大学図書館では欠号が多く、創刊号から全号揃っているのは、法政大学大原社会問題研究所、同志社大学今出川図書館、労働政策研究・研修機構資料センターのみのものである。稀少雑誌である。

私自身は、1990年9月の「日本的経営の光と影」特集など何本か寄稿したこともあるが、主として読者の側にあった。それも、現状分析や理論問題よりも、現代史研究の資料として、必要に応じてバックナンバーを図書館や古書店から取り寄せてきた。

何よりも、冷戦崩壊期に旧ソ連在住日本人粛清犠牲者の調査を始め、ソ連邦崩壊で現れた旧ソ連秘密文書の解読のために、1969年創刊以来の寄稿者であった山本正美・菊代夫妻の回想を徹底的に集めた。山本正美が日本共産党「32年テーゼ」の頃モスクワに滞在し、私が主たる探求の対象とした元東京大学医学部助教授国崎定洞や、その粛清理由となった片山潜秘書勝野金政のラゲリ送還事情を知る、生き証人であったからである。1978年1月号から80年9月号まで26回連載された山本正美「激動の時代に生きて」は、87–90年の山本菊代

「闘いに生きて」36回連載と共に、旧ソ連に在住した日本人約80人の粛清過程を90年代に追いかけたさいの、座右の書であった。後にどちらも単行本になったが、歴史的事実の確定には、初出論文と加筆自叙伝の比較も欠かせない。野坂参三の場合のように、初出の削除や修正が意味を持つ場合があるからである。

そこから派生して、コミンテルンと国際共産主義運動、日本共産党や労働運動の歴史を調べる際にも、『労働運動研究』誌は、貴重な資料だった。例えば1986年3-7月の5回連載、水野津太「共産主義的人間」は、戦時中に獄死した国領伍一郎についてのほとんど唯一の信頼できる証言・資料であり、元日本共産党資料室員・水野津太の事実上の遺言であった。水野の晩年を支えた由井格氏の依頼で遺品整理中に発見したのが、私の「『野坂参三・毛沢東・蒋介石』往復書簡」である（『文藝春秋』2004年6月）。今日では「水野津太資料」として、慶応大学経済学部図書館と同志社大学人文科学研究所資料室に収められている。

1972-73年に小林杜人「わが半生の回想」を12回連載した『労働運動研究』編集部の先駆性・先見性には驚かされる。戦前共産主義運動の思想犯保護、獄中「転向」者の救援者で身元引受人・生活支援者であった小林は、「非転向」を錦の御旗とした戦後の日本共産党にとっては「裏切り者」であり続けたが、実は小林の世話になった戦後の共産党関係者も数多かったことを、今日では教えてくれる。増山太助「戦後運動史外伝・人物群像」は、復刊後の1995-99年50回連載で、その頃は私も定期読者になり、それぞれに面白かったが、97年7月号の「高安重正と牧瀬恒二」は、後に沖縄非合法共産党資料を発掘し、二人の遺した資料を入手・編纂する際に、大いに役だった。共産党員であっても、一個の人間として存在し、個人であり生活者であったことが、今日の研究では重要なのである。

もちろんアントニオ・グラムシやフランス・レギュラシオン理論、ドイツ社会民主主義の紹介、石堂清倫、樋口篤三、中野徹三らの時々の発言も印象に残るが、それらも今日では歴史研究の対象である。伝説・神話になった公式の日本共産党史・革命理論に対する、共産党から排除された人々の異論・反論・告発、活動家の追悼文等もあり、後の歴史的評価・再評価に役立つだろう。

私は3.11東日本大震災後に、「原爆反対・原発推進の論理」と副題した『日本の社会主義』（岩波現代全書）を刊行したが、20世紀の日本の平和運動をフ

クシマ原発事故後に批判的に振り返るさいにも、『労働運動研究』は貴重な史料だった。ヒロシマの原水禁運動の生き証人松江澄の証言や、1988年11月という早い段階での土井淑平の反原発の問題提起が役にたった。

最近集中的に読んでいるのは、早い時期から『労働運動研究』の常連であった佐和慶太郎の諸論文である。『ゾルゲ事件』（平凡社新書）から派生して、「悪魔の飽食」731部隊で人体実験・細菌戦を行った医学博士・二木秀雄の刊行した右派の時局雑誌『輿論』『政界ジープ』誌を調べているうちに、『政界ジープ』が佐和慶太郎の発行した左翼時局雑誌『真相』のライバルであり、戦後10年間にわたって大衆政治の世界で対抗していたことが分かった。731部隊についてのハバロフスク裁判を初めて本格的に取り上げ、二木秀雄と『政界ジープ』を名指しで批判したのも佐和の『真相』だった。その佐和慶太郎の戦後の出版活動の志と公式的でない左翼観が分かるのが、彼の70年代以降の『労働運動研究』誌上での発言なのである。

このような意味で、日本の労働運動・左派社会運動史研究に不可欠な史料として、『労働運動研究』誌の総目録を推薦したい。